
暗き闇夜に差す光

No.6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗き闇夜に差す光

【Nコード】

N3871E

【作者名】

No.6

【あらすじ】

ある出来事のせいで、家族との関係が遠くなってしまった主人公天湊は、引越した祖父の家で自分の重大な秘密を聞かされる。第1部では、引越した先で偶然、天湊同様色々な事情を抱えた同じ年の光と出会って、仲良くなる内容です。

第1部

暗き闇に差す光り

一

三月も末。

車窓から見える景色は丸裸の木々が目立ったが、何本かはすでに花をつけていた。もうそろそろ春が近づいていることが分かった。

この街は都会というにはビルが少なく、田舎というには田畑が少ない中途半端な所だ。

天涅あまねは、今日からこの街で暮らすことになった。以前は父方の祖父の家で暮らしていたのだが、一月前にその祖父が他界した。父はその辛さ故が長年住んだ家を出て、この街に来る事にした。

只今、父の運転する車に、母、弟、妹と一緒に乗り、新しい住居である母方の祖父の家に向かっているのである。しかし、自分は正直言ってこの引越しに快く賛成できなかった。父方の祖父とは小さい頃からずっと一緒にすごしてきた。とても優しい人で、好きだった。周りからはおじいちゃんっ子と言われるほどいつも一緒にいた。しかし病気で亡くなってしまった。思い出したくもない「悲劇」だった。自分は未だに、亡くなった祖父に未練が残っていた。長年住んだあの家を離れたくなかった。だが、親の意思には逆らえず結局引越しをすることになった。

気が重い。母方の祖父母とは一年に一度会うか会わないかで、ここ三、四年はろくに話しもしていなかたし、顔も合わさなかった。いや、合わせられなかった。父方の祖父の体調の為、側を離れられなかったのである。

母方の祖父はなんだか苦手だった。父方の祖父みたいに無条件優しいわけでもない。それに小さい頃から天涅は良い素質を持っている

ると言われ、野球にサッカーにピアノにそろばんに英会話等々、親を通して間接的にやらされた。でも、どれも長く続かず、今は何もやっていない。大体、自分に素質がないことぐらい初めから分かっていた。なのに、祖父の一言のせいで親もその気になってしまい、やらされていたのだった。

それに、訳の分からない事に天渥は才能がある、と言って来るのだった。でも、その才能が何なのかは教えてくれない。幼い頃から言われているが未だに分からない。一生わからなさそうだ。そして、どういふ訳か弟と妹に比べて自分にだけ態度が厳しいのだった。幼い頃親に尋ねてみて、きつと一番上だからしつかりしないさいって意味なんだよ、といわれた事があった。それを信じてはいたが、今はただたんに嫌われているのだろうと思っっている。こんな祖父と一体どうやって暮らしていったらいいのか全く分からなかった。ハ！。

溜息をついて景色を眺める。

河川があり、橋があり、電車が通っているのが見えた。車は黙々と目的地へと走って行った。

しばらくして、ある一軒の家の前で車は停まった。ここが母方の祖父の家である。

周りをそんなに高くない築地塀で囲んであり、あまり立派じゃない門の両脇には、金木犀の木が一本ずつ立っている。今は葉もなくみずばらしいが、これから少しずつ葉もついて花が咲くのだろう。

庭はそんなに広くはなく。地面は小石で埋められていた。

家自体はというと、二階建てで以前住んでいた家よりは広い。見た目はあまり頑丈そうには見えないが、何気にしつかりしていると昔聞いた気がする。

「こんにちは。」

横開きの玄関の前で父が言った。だが、反応は無い。

「あら、いないのかしら。」

首をかしげる母。

「こんにちは、義父さん。」

ドンドンと玄関を叩きながら父がもう一度言った。しかし、今度も反応が無い。

「おかしいな。おい、ちゃんと覚えておいたのか？」

「当たり前じゃない。昨日ちゃんと伝えておいたのに。どこに行ってるのかしら。」

心配気に眉を寄せて母が言った。

と、その時。しわがれた野太い声が聞こえた。

「おお、もう来とったか。すまん。」

全員で一勢に振り向くと綿パンにジャンパーにマフラーの出で立ちの祖父がいた。

「お父さん！もう、どこ行ってたの？今日来るって、昨日電話で言ったじゃない。」

母が非難がましく言った。

「いやあ、すまん。梅子が散歩に行きたいって吠えまくってなあ。」

祖父の隣には首輪をつけられ、紐で繋がれている犬の梅子がいた。

梅子は、何年前か前、祖母が亡くなった後よそから貰った茶色い柴犬だった。ちなみに梅子というのは祖母の名前である。祖父が、妻が亡くなった寂しさを補う為、梅子と名づけたらしい。

梅子は、何か臭いを嗅ぐようにしてから自分に焦点を合わせ、ワンワンと吠えながら飛びかかって来た。

「あつ。こら、梅子！」

祖父が叫ぶが、お構いなく顔をペロペロ舐めまわされた。

「う、梅子、くすぐりたい。それにお前また大きくなったな。重いぞ。」

舐めるのをやめさせ、頭をなでて言ってやった。

「なんかアニキだけに懐くんだよなー、梅子ばあちゃん。」
弟が不思議そうに言った。

「前より大きくなってるー、怖いよー。」

妹が母に隠れるようにして言った。

「全く。浮気者めが。」

冗談のように祖父が言うが、目は半ば本気だった。

「お父さん、それより早く中に入りましょう。」

「鍵はかかってないから早く入れ。和也かずやと咲も寒さきいだよ。」

祖父に聞かれうん、と二人とも頷いた。

そして、父が玄關を開け中に入って行った。祖父が入り際に、まだ梅子の側に突っ立っている自分に言ってきた。

「天溼、梅子をちゃんと小屋に入れておけ。それと、これからお前が梅子の世話係だ。梅子はわしよりお前のほうがいいらしい。全く。」

嫌味混じりに言っ、中に入っていた。本当に自分はこの祖父に嫌われているらしい。元からだったから悲しくは無いが、理由がわからないので腹が立つ。

「梅子って、死んだばあちゃんの名前つけてどうすんだよ。未練たらしいっていうか、なんていうか。」

ハッ、ハッと舌を出して、尻尾をヒュンヒュン振っている梅子をなでながら言った。

「これから俺が主人らしい。お前…、前々から思ってたけど梅子って名前おかしいだよ。…そうだ。チャコってどうだ？毛の色は茶色だし、メスだから、「子」をつけてチャコ。」

そういうと、一段と嬉しそうに尻尾を振った。どうやら気に入ってもらえたらしい。

「お前がいてくれてよかったよ。」

梅子もといチャコを小屋に入れて、最後にひと撫でして言った。

「またな。」

ワン、とチャコが吠えるのを聞いて家の中に入って行った。

玄關に入るとすぐ右に曲がる。すると廊下が続く、両脇に部屋が二つずつ並んでいて、その奥には風呂場などがある。左側のふすまを開けると、他の家族がコタツの中に入っていた。

「天涅、手を洗ってらっしゃい。台所でいいから。」
その母に言われたので、居間の隣にある台所で手を洗った。
「ハ。」

自然に溜息がでた。これからどうやって祖父とやっていこうか考えてしまう。何であんなに嫌われているの全く分からないのに、意思の疎通などできそうにない。

そんな事を思いながら居間に行った。

「ねえ、ねえ。俺たちの部屋とかあったりする？」
弟が祖父に聞いているところだった。

「ああ、もちろん。少し狭いがな。あつ、そうそう。机があるへやが一つしかないんだ。でも、そこが一番狭い。どうするかは三人で考えておくれ。」

「うん、分かった。部屋って全部二階だよな。」
弟が聞くと、そうだというように祖父が頷いた。

「じゃあ、行ってみようぜ。」
「うん。天涅兄ちゃんも行くこつよ。」
そう妹に言われ、行くことにした。

二階の階段は段差が高く、少し上り難い。しかも狭いので三人で縦一列にならないと無理だった。

二階につくと、一階と同じように廊下が続いていた。そして部屋が、左側に二つと右側に一つあった。右側にはもう一つあったのだが、どうやら押入れらしかった。

部屋は祖父が言っていた通りあまり広くなくて、部屋はどれも同じ広さだった。だから、机がある右側の部屋は当然狭く見えた。左側の部屋には、机が無い代わりに本棚と小さなテーブルが置いてあった。

「うーん、どうしよう。」
弟が唸った。

「アタシは、机無くても広いほうが良いからこつち！」
妹が左側の一つの部屋を指した。

「ちえつ、早い者勝ちか。アニキはどうすんだよ。」

そう聞かれて、迷っていたのでさあ、と首をかしげた。

「さあつて。まったく、本当ダメアニキだな。」

睨むようにして言ってきた。

「お前はどうかんだよ。」

「俺は、やっぱこつちでいいや。日当たりも良さそうだし、机無くても別にいいし。」

妹が選んだ隣の部屋を指した。自分は結局残り物になった。こうなるだろうとは予測していたが。

「ヤッター！自分の部屋だー！」

妹が嬉しそうに、新しい自分の部屋を駆け回った。

「そんなに走るなよ。下に響くだろ。」

弟が呆れて、妹をたしなめた。しかし、顔は凄くほころんでいて、嬉しさが満ち溢れていた。以前すんでいた家では、三人共同じ部屋を使っていたので開放感を感じているのだろう。自分もちろん嬉しい。だが、以前の部屋にはいろいろと思ってもあり、愛着もあった。

ふすまを開けて一歩、新しい部屋に入った。すると、冷たい空気が部屋中を覆っているのが分かった。こちら側は確かに日当たりが悪いらしい。

部屋の中には、机、タンス、押入れがあった。床は畳が敷いてあって、所々に染み等があった。長年使っている事がありありと分かった。

ここに、明日自分の荷物が届く。あまり多くは無いが、今は人がすんでいる感じは全然ないので、それでも雰囲気は今とは大分変わるだろうと思われた。

窓が一つついていて、カラカラと開けてみると、冷気が入ってきた。寒かったが気にせずに関けっ放しにして、窓から頭を乗り出して下を見た。乗用車一台がギリギリ通れるかという程狭い道路があった。そして、家の向かい側には点々と住宅が並んでいて、そのま

た向こうに河川と橋が見えた。なんだかちよつとした田舎の風景のように思えた。

今日からここで暮らしていくのか。気が向かないのは変わらなかった。もしかして、自分の人生に楽しみというものはないのでないかとさえ思ってしまうぐらい憂鬱だった。

ハ―。もう一度溜息がでた。いつか、あの優しくかった祖父に、溜息をつくとその分幸せが逃げていくよと、教えてもらったことがあった。だが、祖父がなくなって以来溜息はくせになっていた。祖父の死以後、自分の幸せはもう無くなったのだと思つたからだつた。本当に絶望だった。それに自分は祖父が息を引き取る前……。

絶望という記憶の淵に陥っているとき、弟と妹が階段を下りていく音が聞こえた。その音に現実を引き戻された。そして、すごく手が冷たくなっていることに気付き、窓を閉めた。部屋の中は一層寒くなっていた。

「俺って…、バカだよな。」

今、以前の事を考えていても仕方ないのだ。自然と思い出してしまつ自分に嫌気がして呟いた。

いつまでもここにいと風邪をひいてしまいそうだったので、一階に下りることにした。現実を受け止めたくはないが、受け止めざるを得ないので嫌がる気持ちを抑えて階段を下りて行った。

これから、この家で何が起こっていくのか。

咲の事は誰にも分からない。

二

次の日、自称顔の広い祖父が呼んだ何人かの助人と一緒に引越しの荷物を整理した。

一段落した後、母や助人のおばさん達がつつた昼ご飯を全員で食べた。さすがに広い家だといつても十人ちよつとも集まれば狭く見えた。

「いやー、かしこそうなお孫さん達ですねー。」

助人に来た中年のおじさんが、自分達兄弟を見て祖父に言った。

「いやいや。」

言葉とは裏腹に嬉しそうに祖父が言った。

「おじようちゃん、お名前はなんていうの？」

助人にきたおばさんが、妹に聞いた。

「咲。今度小学三年生になるの。」

ニコツと笑って妹が言った。

「あら、そうなの。かわいいわねえ。」

おばさんが本当にかわいいという風に顔をほころばして言った。

「隣のお兄ちゃんの名前は？」

また違う助人のおじさんが弟に聞いた。

「和也です。おじさんは近くに住んでるんですか？」

「ああ。この先に河川があつてはしがあるんだけどね、その手前の

住宅にすんでいるんだよ。良かったらいつでも遊びにおいで。」

そういわれて、はいと素直に弟が頷いた。

「あなた、名前はなんていうの？」

母と一緒にご飯を作っていたおばさんが聞いてきた。

「天渥です。」

「あつ、確か今年で高校一年生よね。さっきお母さんから聞いたの。

ウチの子もそうなのよ。隆博っていうんだけど、高校同じらしいか

ら見かけたらよろしくね。」

ニコニコと愛想よく笑ってきた。だが、自分はその隆博がどういう

奴なのかも分からないし、このおばさんもどういう人なのか全く分

からないのに素直には頷けなかった。だから、曖昧にはあ、と返事

をしておいた。

「へえー、隆博君もうそんなにおおきくなったの？」

妹に名前を聞いたおばさんが言った。

「ええ、そうなの。」

「ウチはまだまだ小学生。咲ちゃんより一つ上なんだけどね。そう

だ、咲ちゃん。家に遊びにいらっしやいよ。そしたら家の子も喜ぶからさ。」

「うん。」

素直に頷く妹。まだまだ小学生。純粹なのは分かるが、何も考えていないのではないかと密かに思ったりもした。

「君はサッカーやっっているんだね。おじさんとこの息子もサッカーやっってるんだよ。中学二年生になるんだけどな。」

「あつ、じゃあ俺と同じだ。サッカー部ですよね。」

「君も入るつもりだろ。一緒に入ったら良い。」

「はい！」

やけに、先ほどのおじさんと弟の話がはずんでいる。

自分は、祖父がなくなつて以来他人と付き合うのが苦手になった。相手が好意を向けてきても受け止められず、突き放してしまうのだ。でも、だからどうだということでもない。他人とかわるよりは一人でいた方が良いと思うようになったから。

父方の祖父が亡くなる前は、明るい性格で周りにはいつも誰かいて、クラスでも輪の中心だった。だが、心の支えだった祖父がなくなつてから、以前の自分とは全くの正反対になっていた。そうならざるをえなかったのだ。別にこうなつたのが悪いとも、悲しいとも思わなかった。祖父の死は、自分にとつて一生消えない傷となつて残るものだ。だから、以前の自分には戻れない。そんな資格もないそれにもう、他人との関わりは持ちたくなかつた。

「天涅。」

いきなり祖父に名前を呼ばれた。慌てて視線を合わせた。

「それを食べたなら梅子に餌をやつて来なさい。」
命令されているように聞こえたが、自分のやるべきことなので反発できず、ただうん、と頷いた。

口に食べかけのおにぎりをつっこみ、台所に行つて、ドッグフードを持って庭に出た。

チャコの餌のやり方は、祖父に手厳しく教えられていた。それに

餌のやり方だけでなく、ブラッシングやしつけ等チャコに関することを細々と教えられた。

餌のやり方は、朝、昼、晩と全部違っていた。朝は量少なめ、受け皿の五分の二。昼は少なくとも多くもなく、五分の三。夜は量多め、受け皿一杯。という風だった。水の量も、水用の受け皿に半分ときつちりと決まっている。というより、祖父がそう決めたらしいのだが、本当に細かくてイライラしてしまう。

「本っ当お前って可愛がられてるよな。」

チャコにそういいながらドッグフードを受け皿に入れ、水も入れてやった。すると、それをおししそうにガツガツ食べ始めた。

「そんなにハラ減ってたのか。」

そう呟いた時、玄関が開いて誰かが近づいてくる足音が聞こえた。

ピタツと何歩目かで止まった。気付かない振りをしてチャコを見ていたら、思ったとおりの人物に名前を呼ばれた。

「天渥。」

振り向きたくなかったが、振り向かざるを得なかった。

「何、じいちゃん。」

何か文句を言われる、と思いながら言った。

祖父はしばらく何も言わず、こちらをじっと見ていた。自分も目をそらさずじっと見た。しばらくして、祖父が唐突に口を開いて言った。

「天渥、お前はとうとう才能を無くしてしまったのか。その原因はあの事にあるんだろ。あの事のせいでわしが唯一認めていた物がお前には無くなった。」

眉間にしわを寄せて睨むようにして見てきた。怒っているわけではない。さげずんでいるのだと思った。でも、才能が何の事なのか分からないので、祖父が何を言いたいのかは全然分からなかった。それに、あの事って…。

「唯一わしの孫だと思っていた才能が無くなったお前とは、今後何の関係も無い赤の他人だ。これからわしとお前は、ただの同居人に

しかすぎん。分かったな。」

廠かに、叩きつけるようにそれだけ言っただけ言っただけで玄関の中に入って行った。しばらく、呆然と祖父が消えたところを見ていた。一体、自分はさつき何を言われたんだ？今後何の関係も無い赤の他人だって？何でいきなりそんな事を言われたいといけないんだ？それに、唯一孫だと思っていた才能が無くなったってどういう意味だ？

いろんな疑問が湧いてきた。全くもって先程祖父が言ってきた言葉の意味は分からなかったが、一つだけ分かったことがある。

自分は祖父に見放された…。

この祖父は苦手で、自分に対していつも厳しくて愛着なんて全然なかったけど、見放されたと思っただけ冷たくて重い氷が心の中に落とされた、そんな気持ちになった。この場に立っているのが辛かった。いや、あの祖父がいるこの敷地内にいるのがつらかった。自分は何もしていないのに、一方的だったのにもかかわらず、この場から逃げ出したかった。

それから、ただこの場から逃げることだけを考えた。そして自分はいくぶん分ちからぬまま、水を飲んでいたチャコを小屋からだして、紐をつけて家を飛び出した。

気が付くと、チャコの散歩コースを歩いていた。はっと思っただけ立ち止まると、チャコがクウーンと鳴いた。

自分は一体、今何をしているんだ。そう思った。こんな経験は初めてだった。それ程、祖父の言葉に衝撃を受けたのだろうか。

ふうー。

ゆっくりと息を吐いてみる。そして、祖父の言ったことを思い返してみた。

『天溼、おまえはとうとう才能を無くしてしまったのか。その原因はあの事にあるんだ。あの事のせいでわしが唯一認めていた物がお前には無くなった。』

才能の事はわからないが、あの事とはおそらく、父方の祖父が亡くなった事だろう。でも、何故そのせいで祖父が言っていた唯一の才

能がなくなつたのだろう。もしかして、昔の俺と変わった事と関係があるのか？だとしたら俺の才能って…。

考えてみるが全然分らない。多分、自分じゃ分かっていない何かを才能だと言っているのだろう。それだとしたら独りで考えても分かるわけないじゃないか。地面ばかり見て歩いていたので、コンクリートを見るのにも飽きてふと空を見上げた。と、その時、今まで歩いてきたチャコがいきなり走りだした。

「お、おいっ。チャコ!？」
物凄い勢いで走るチャコの力に負けて、紐を掴んでいた手を放してしまった。

「チャーコー!!!」
名前を呼ぶが、聞く耳を持たず走り去ってしまった。見失うわけにはいかないので、とにかく慌てて追いかけた。

「ワン、ワン！」
チャコが、片手に焼き芋を持っているおじいさんと孫らしき少年の二人組みに尻尾を振って吠えた。

「ん？何だ、この犬は。」
おじいさんの方が、不審がるようにして言った。

「お前、この芋が食いたいんだろ？」
少年が、手に持っていた芋をちぎってあげた。嬉しそうに食べるチャコ。

「なんか図々しい犬だな。」
おじいさんが不服そうに言った。

「いいじゃん。犬だし。」
少年が、ガツガツ食べているチャコに、もう一握りちぎってあげた。
「あ、お前はまたあげたな。せつかく買ってやったのに無駄なことをして。」

呆れ半分、怒り半分という風におじいさんが言った。
「無駄ってなんだよ。別にいいじゃねーか。買ってもらったって俺

が食ってんだから俺のもん。もうじいちゃんに文句言われる筋合いはないぜ。」

ギロツとにらんで言った。だが、おじいさんも負けていない。睨みをきかした目をして、ドスの聞いた声で言った。

「こんの、クソ生意気なガキが。」

負けじと少年が言おうとした時、だれかが走ってくる音が聞こえてきた。それに応えるように、既に芋を食べ終わったチャコがワン、と吠えた。

「チャーコー。」

少年が走ってきながら犬の名前を呼んだ。そして、近くまで来て立ち止まって息を整えた。

「ワン、ワン。」

そんな飼い主に近づいていきながら、チャコが吠えた。

「あの子が飼い主か。光、お前と同じくらいの年だろっな。」

光と呼ばれた少年は、まだ肩で息を切らしている少年、天渥に近づいて言った。

「よう。それ、お前の犬か？」

「えっ…、うん。」

いきなり知らない少年に話し掛けられ、驚きながらも頷いた。

「へえ。こいつ可愛いな。チャコっていつのか？」

「またもや聞かれたので頷く。」

「そっか。」

相手はそう言って、チャコの頭を一撫でした。

「あの、チャコが何かした？」

「え？ああ、別に何もしてないぜ。ただ、こいつがオレの芋食いたそつな顔してたからさっきあげたんだ。」

「チャコに芋を…って、ええっ?! チャコ、何やってるんだよ勝手に。」

叱ると、クウーンと言って項垂れた。

「そつ叱ってやるなって。」

少年が言った。

「でも…。」

言いよどんで少年を見た。そして、俺はそこではじめて相手をまじましと見た。

年は自分と同じくらいで、身長も変わらないように見える。しかし、髪の毛は少し長めで、所々に金が交じっている。そして、よくみると右の耳にピアスが二つついているのが見えた。えっ、と驚いていると、もう一人いるのに気付いた。

少し後ろの方に、少年の祖父らしき人がいた。その人は、スキンヘッドに、黒のスーツを着ていた。スーツの中に着ているシャツは第三ボタンまで開けていて、首には金のネックレス、腕には金の腕時計をはめていた。顔は、自分の祖父より若く見えたが、目がするどくて睨まれたら一步も動けそうになかった。

ここまで観察して気付いた。

この人達、絶対ヤクザだ。

どうしようかと考えていたら、少年が話し掛けてきた。

「ところで、あんまし見ない顔だけだ。」

「あ、えつと、俺、昨日引っ越してきたんだ。」

慌てながらも一応答えた。

「そういうことか。オレ、大野光っていうんだ。アンタは？」

「望月天渥。」

「天渥っていうのか。顔に似合ってるな。」

そう光が言った時、コホンと後で咳き払いが聞こえた。

「あ、じいちゃん忘れてた。」

バツが悪そうに、光が後ろを振り向いて言った。

「わしを忘れるとは良い度胸してるじゃねーか、光。」

胸のところで拳を握って言った。その仕草は只者には見えなかった。

「まあまあ。」

「このクソガキが。」

そう言っつて、何もせず拳を下ろしてくれたときはホツとした。

「天涅君って言ったな。もしかして、金木犀が門の所に咲く家に引越してきたのかい？」

「案外優しげに話し掛けてきたので、安心して頷いた。」

「何で知ってたんだよ。」

光が聞くと、

「わしを誰だと思ってるんだ。近所のことなら何でも知ってるんだぞ。」

「そうだったけ？あ、そうだ。天涅、こんな所で立ち話もなんだからオレン家来いよ。」

「えっ…。」

いきなり誘われてしまった。ヤクザの家はあまり覗きたくはなかった。

「そうだな。人生は一期一会っていうしな。寄っていきなさい、天涅君。」

おじいさんにも誘われてしまった。断り方が思いつかない。

「来いよ、天涅。あつ、それとも家に早く帰らないといけないとか？」

そう聞かれて、良い口実ができたとおもったが、よく考えてみたら飛び出してきたのですぐ帰るのは不味いし、帰りたいとは思わなかった。

「どうするんだい？」

おじいさんにも言われて、思わず行きます、と口を動かしました。

「じゃあ、決定。オレン家近くだからさ。」

そして成り行き上、大野家へ行くことになった。

（もしかして、門のところでもスラァッってヤクザの兄ちゃん達が並んでいたって…。考えるだけで恐ろしい…。）

自分で勝手に妄想を膨らませて、二人の後を歩きながら不安を募らせていたのだった。

それから少し歩いて、ある一軒の家の前で光が止まった。

「ここがオレン家。」

「えっ、ここ？」

大きい門があつてそこをくぐつたらヤクザの恐い顔した兄ちゃん達がズラーツ…といるのではなく、こぢんまりとした古風な家があるだけだった。

「ボロくみえるけど、中は頑丈だから大丈夫。」

「光っ、何がボロく見えるだ。まだボロくないと何度言つたら分かるんだ！」

「だつてボロじゃん。天涅もそう思うよな。」

玄関を開けて入りながら、光が聞いてきた。

「俺ん家もこんな感じだから、なんとも言えないな…。」

そう言つと、光が驚いたように言った。

「そうなのか？意外だなー。引つ越してきたつて言つてから新築かと思つたのに。あ、犬は中に入れないから柱に紐結んどいて。」

光に言われたとおり、柱に紐を結びつけた。

「おとなしくしてるよ、チャコ。」

「ワン。」

一声ないてお座りをするチャコを見届けてから中に入った。

中に入ると板張りの廊下があり、まっすぐ進むと、客間があつて居間があつた。

「ここ居間。こたつすぐあつたまるから入つておけよ。」

そう言われたので、素直に従つた。

向かい側におじいさんが座つたのでわざと目を合わさないように俯いた。ヤクザじゃないかもしれないが、そう見えてしまう。

しばらくして光が、お茶と羊羹を持って来て隣りに座つた。

「なあ、天涅つてもしかして高一になる？」

お茶と羊羹を配りながら聞いてきた。

「うん。」

「じゃあ、もしかして柏高とか？」

「多分そんな名前だったよな……。」

そういえば高校の名前なんてろくに見てなかった事を思い出した。勿論受験をしたのだが、正直高校なんてどこでもよかった。このさいだからという事で、祖父の家に近い高校を受けて、たまたま受かったというだけである。

「多分って、受験したんじゃないのか？」

「まあ、そうだけど。」

「そうだけどって……。でも、柏高なんてそんなにレベル高い所ってわけじゃないし名前が曖昧でも仕方ないか。オレもそこ行くんだけどさ、同じクラスになれたらいいな。」

愛想良く言う光がなんだか不思議に思えた。自分に対して、こんなに屈託なく話し掛けてくれる者は、昔の自分と変わって以来誰もいなかったので変な感じだった。

「どうした？」

考えていると顔を覗き込まれた。

「あ、ううん。何でもない。」

慌てて首を横に振る。

「光があまりにもよくしゃべるから驚いてるんだろっ。」

おじいさんがお茶をすすりながら言った。

「な訳ねーだろ。なっ、天涅。」

「あ、うん。」

別に驚いてはいないので首を縦に振った。

「ジョーダン、ジョーダン。そんなに真剣な顔で頷かなくても良い。光と違ってかわいげあるな、天涅君は。」

「うるさいな。どうせオレはかわいげねーよ。」

「かわいげあったほうが気持ち悪いわ。」

そう言われた光がおじいさんを睨んだ。

「天涅、オレの部屋行こうぜ。このクソじじいがうるさくてかなわないからな。」

「えっ…。」

有無を言わせず、腕を引つ張られ、温かいこたつから抜け出された。そして光は、荒々しくふすまを開けて廊下に出た。後に続くと、すぐ目の前のふすまを開けて中に入った。どうやらここが光の部屋らしい。あまりごちゃごちゃしておらず、すっきりした和風の部屋だった。

「やっぱここ寒いな。暖房入れるか。」

そう言つてスイッチを押すと、部屋の一角に設置された暖房が動きだした。以前住んでいた家も、新しく住む家も、暖房は居間に一つだけなので、自分の部屋に暖房がついているのが不思議だった。

「なあ天涅、こっち来る前はどこに住んでたんだ？」

どかつと畳の上に座つて、光が聞いてきた。

「長崎。」

自分も光の前に座つて言つた。

「へえー。ここは山口だから…そんなに遠くない？」

「さあ？車でいける距離だし、遠くはないんじゃない？」

「そっか。ま、地理なんて全然分かんないんだけどさ。でも、何で引越してきたんだ？」

突然聞かれて正直に言おうかどうか迷つたが、結局本当の事を言う事にした。

「父さんの方のじいちゃんが、亡くなつたから。今度は母さんの方のじいちゃんの家で暮らすことになつたからさ。」

「でもさ、じいちゃんが亡くなつても家はあるんだろ？何でわざわざ引越したんだ？」

意外と鋭い所を光はついてきた。確かなところは親からも聞かされていないが、予想をいっておくことにした。

「多分、父さんがじいちゃんの事思い出しちゃうからだと思う。自分の父親が亡くなつたのが辛いんだよ。」

「ふうん。そういうもんか。」

光の言つた事に思わずえっ、と言つていた。そういうもんかっつてど

ういうことだ？普通ここで納得するんじゃないのか？

「ああ、オレ親いないから。あのじいちゃんだって血は繋がってないんだ。」

「えっ、そうなの？」

本気で驚いた。今まで周りに親がない奴なんて誰一人としていなかったから、心底驚いてしまった。

「そんなに驚いたか？まあ、普通オレみたいなのって、施設とかに預けられるのが当たり前だから仕方ないか。」

ははっ、と笑う光。親がないって大変の事だと思っただが、全然そんな風には見えなかった。

「実を言うとオレ、捨て子なんだ。」

またまた驚いた。親がないっていつから離婚したとか、事故で亡くなったとか、そういうことだと思っただけなのに、まさか捨て子だったとは。

「ひくだろ、捨て子って。」

「いや、ひく以前にビックリした。」

「ビックリか。大抵の奴らはこれ言ったらひいてさ。よく分かんない、納得したような顔するんだぜ。分からないでもないけどさ、こんな外見だし。」

そう言っただけ、髪と、耳のピアスを触った。

「俺は良いと思うけど。そいつの、自分の勝手じゃん。」

「そんな事言ってくれる奴、初めて見た。なんか天淫って変わってるな。」

「変わってる？…初めて言われた。」

そう言っただけ、また驚きの表情をした。

「マジで!？」

「そんなに驚くなよ。ていうか、変わってるの俺じゃなくて、光の方だから。普通初対面の奴に、自分が捨て子だなんて言うか？」

「え？あつ、そうか。オレら初対面か。天淫ってそんな気しないん

だよな。なんでだろ？」

本当に不思議そうに首をかしげる。それを見ていると、笑いがこみ上げてきた。

「はははっ、そんな真面目な顔して考えるなよ。」

「あっ、天涅、初めて笑った！全然笑わない奴だと思ってたけど、笑うんだな。」

光が、にこつと笑いながら言った。

光にいわれて、祖父が亡くなってから笑いが自然にこみ上げてくることなんてなかったように思えた。それが初対面の相手に笑わされるなんて、ますます光の存在が不思議に思えた。

「オレの生い立ち聞かせてやるよ。じいちゃんから聞いた話だけだな。」

笑いがおさまってから、光が話を切りだした。

「じいちゃん、今はああだけど、昔は和服着て、下駄はいてたヤクザの組長だったらしくてさ。」

ここまで聞いて、やっぱりと思った。今でも充分組長っていてもおかしくはない気がするのだが。

「ある日じいちゃんが、二人の子分連れて外に出て戻って来たら、屋敷の門の前に、毛布に包まれた赤ん坊がいたらしい。その赤ん坊の胸の所に、四つに折り畳まれたメモが乗っかってたんだ。確かそのメモには、『誠に勝手ですが、この子を預けていきます。もう、独りでは育てられませんか。名前は光です。どうか、可愛がってあげてください。』って、書いてあったんだ。じいちゃんこれ見た瞬間スッゲー怒ったらしくてさ、二人の子分が震え上がったって言うた。可愛がってあげてくださいとか書いてあるくせに、ヤクザの屋敷の前、しかもその時のじいちゃんの組は、警察もつかつに手を出せなかったぐらい権力もつてたらしくて、そんな所に置いておくなんて有り得ないって怒ったんだってよ。それからじいちゃん、その赤ん坊を子分に助けてもらいながら育てたって。でも、その赤ん坊が物心つく前に組長やめて、このボロい家に来たってワケ。」

作り話のような話だな、と思った。だが、それは口に出さず、変わりに違うことを尋ねた。

「自分の親が憎くないの？」

「昔はすっごく憎いつて思ってた。でも、どうせ八ナツから顔も名前も知らないんだ。憎いつて思う対象が抽象的過ぎてバカらしくなつてさ。親だつて人間なんだから、子供育てるのに疲れたんだろつて思うようになったんだ。」

「前向きだな、光つて。」

「そうか？なあ、天涅はどうなんだ。なんかなかったのか？今まで。」

興味津々に聞いてくる。何かつて聞かれると、やっぱり思い出すのはあの事しかない。口は開きづらかったが、光も話したんだから自分も話さないとな、と思つて、ぽつりぽつりと話始めた。

「父さんの方のじいちゃんが亡くなつたつていつただろ。俺、産まれてからずっとじいちゃんと一緒でさ。だからじいちゃん子だったんだ。」

でも、あんまり体が強くなって中学校に入ったら寝たきりになつた。そしたら、中二の頃から入院し始めて、中三になつたら受験勉強しないといけないのに、じいちゃんのことを気になつて全然受験勉強できなくて、結局柏高受ける事になつたんだ。父さんと母さんは、じいちゃんはもう亡くなるつて知つてたから、母さんの方のじいちゃんの方に近い所を受けさせたらしい。でも、俺全然そんなの知らなかつたから、受かつたつて聞いたとき、急いでじいちゃんに知らせにいつたんだ。そしたら、凄く喜んでくれてさ。

それから何日か後に、夜中いきなり起こされて病院に行つたんだけど、もう亡くなる直前つて雰囲気だつたんだ。俺、病室に入れなかつた…。じいちゃんが死ぬつてというのが恐くて……。そしたら父さんが、じいちゃんが俺の事ずつと呼んでるつて言つて、病室に入れようとしたんだ。でも、足が動かなくて、中に入れなかつた。父さんがずつと入れようと頑張つてただけど、俺は入れなかつた。

それから、ピーツって心電図の音が聞こえてきて……。とうとう俺はじいちゃんの死に際に会えなかった。父さんも、自分の親の死に際に会えなかった。

それから、弟と妹がいるんだけど、父さんと弟は冷たく接してくるようになって。母さんも一歩ひいてる感じですよ。妹は幼いからよく分かってないらしくて、前と変わらないんだけど。そんなわけで、家族の中じゃ、俺だけのけ者状態。」

思ったより、スラスラと言葉が出てきて驚いた。それに、話してみると少しスッキリした。

「そういう事があったのか。なんかヒト（人間）って表から見たら何も分からないけど、こうやって話してみると今までどうやって過ごしてきた今があるってというのがわかるから笑えるよな。」

オレもさ、捨てられたって知ったときは親を憎んだし、人間なんて価値がないって思ってた誰ともかわりをもとうとしなかったんだ。でも、じいちゃんがしつこくオレに、じいちゃんの昔話をしてきたんだ。初めはやめてほしかったけど、だんだん話を聞いてくうちに夢中になってさ。気付いたらじいちゃんと、笑って話してたんだ。そしたらじいちゃんに、『人間は表から見ただけじゃ何も分からないけど、こうやって話してみると、今までどうやって過ごしてきた今があるってというのが分かるから、人間は面白いだろ』っていわれたんだ。確かにって思った。親を許せる訳じゃないけど、何か事情があったわけだし。人間ってちゃんとその人と向き合って話さないと全然分からないんだって思ったんだ。それに、外見だけじゃ分からない事を知るのって楽しくてさ。発見が一杯って感じで。なあ、天湊もそう思わないか？オレの話聞いてて思っただろ？」

「俺は、光がそんな事考えて、誰かに伝えられるのが凄いと思った。初めて光を見た時、恐そうな奴としか思えなかったけど、光の話聞いて、全然印象変わったよ。確かに人って、外見だけじゃ分からないよな。」

そう言うと、光が嬉しそうな顔をして、うんうんと頷いた。

「そうだよなー。オレみたいな奴がこんな事考えてるなんて、はたからみたら全然わかんないよな…って、ちよつと待て。オレみたいな奴ってどういうことだ？なんか、けなしてないか自分のこと？」
嬉しそうな表情を一変させて、「？」の顔になる光。ころころと表情が変わる奴だとおもったら、笑みがこぼれた。

「あ、今笑ったな！どーせオレは何も考えてないように見えるよ、ええ、そうですとも。」

何故か投げやりな態度になっている。

「別にそんな意味で笑ったんじゃないって。ていうか、何勝手に言っただよ。光って案外思い込み激しいな。」

「…天淫って見かけによらずズケズケと言うなー。ま、いいけどさ。そういうの知れたのもこうやって話せたからなんだけど。一期一会ってよく言うものだよな。ん？なんかよく考えてみたら、全部じいちゃんのうけつりのような気が…。」

「仕方ないって。年の功だよ。」

「そっか。そうだよな。あははははは。」

軽く、リズムのいい笑い声を立てて笑う光を見て、バカなことで笑っているな、と思いながらもつられて笑ってしまった。

笑いながら、自分が家を飛び出して来た事を思い出して、話してみようかという気になった。

「あのさ、俺母さんの方のじいちゃんの方に引越してきたっていつただろ。そののじいちゃんが、俺の事目の敵にしてるんだ。光達に会う前、じいちゃんにいきなり、これからわしとお前は赤の他人だって言われて、じいちゃんの顔見なくなかったから家飛び出してきたんだ。チャコはなんとなく連れてきちゃったんだけど。」

八ハツと、何でもないことのように笑って言ったら、いきなり光が激怒した。お前表情変わりすぎだろ、と突っ込むまもなく怒り出した。

「はあ？何だよそれ。いきなりこれから赤の他人だと思えだつて！

「ふざけんじゃねーよ、何だよそのじいちゃんは！！」

何でそんなに怒るのか分からなかった。自分は昔から嫌われていたから、それが当たり前だと思っていたから、余計分からなかった。

「何で光が、そんなに怒るんだよ。」

「何でって、そのじいちゃんと血繋がってるんだろ。なのに、これから赤の他人だと思えって、ふじゃけんじゃねえって気しないか？オレのじいちゃんは、口悪くて冗談きついけど、何の関係もないオレを拾って、面倒見てくれたんだぜ。なのに、天涅のじいちゃんは・・・。あー、くそつ、腹立つ！！」

イライラと、足を揺さぶりながら光が言った。

「人って、色々あるんだと思う。光のじいちゃんは良い人だし、すごく人情もあるけど、俺のじいちゃんはそこが欠けてる人だから。仕方ないんじゃない？」

そう言うのと、光が呆れたような表情をして、口をOの字にした。

「・・・天涅って、諦め早いっていうか、なんていうか。そこが長所なのか短所なのか判断しづらいな」。でも、仕方ないっていえば、仕方ない事だよな。天涅が言ったことにも一理あるっちゃ、あるか。」

「別にいいよ、あのじいちゃんのこと。変な事言っでごめん。」

「変じゃないけどさ、お前のじいちゃん怒らせるような事したの？」
違う、と首を振った。

「やっぱり。よく考えてみたらなんかおかしくないか？ちよつと気になるな。」

「もういいって、じいちゃんの事は。それに、これは俺の問題だし。」

「・・・分かったよ。確かに他人のオレが口出しすることじゃないな。」

そこで祖父の話は終わった。それから二人で他愛ない話をして過ごした。

時間はあっという間に過ぎていき、光の祖父が五時に呼びに来たと

きは驚いた。

「しまった、もうこんな時間?!」

「気付かなかったな。」

二人して慌てて立ちあがった。

「初対面なのに長話してたな。そんなに気が合ったか。」

「まあな。色々話したんだぜ。なあ。」

「うん。色々ね。」

今思えば、こんなに長話したことなんて亡くなった祖父以来だった。そして、玄関に向うとそこにチャコがいた。

「あれ、チャコ?」

不思議に思っていると、光の祖父が答えてくれた。

「外で寒そうに待ってたから入れてやったんだ。なかなかおとなしくて良い犬だな。」

「あつ、ありがとうございます。」

礼を言って、慌てて靴を履いてからチャコに謝った。

「ごめんな、チャコ。すっかり忘れてた。早く帰ろうな。」

「ワン。」

それに答えるように、尻尾を振って一声鳴いた。

「じゃあ、またな。いつでも来いよ。」

「うん、またな。どうも、お邪魔しました。」

「気をつけて帰りなさい。」

「はい。」

そして、玄関を開けて寒い外へと一歩踏み出した。

それから家路を、早く行かないと思う気持ちと、帰りたくないと思う気持ちがない混ぜになった気分です歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3871e/>

暗き闇夜に差す光

2010年10月14日13時39分発行